

第9回 国語科学習デザイン学会研究大会 岐阜大会

プログラム 【2次案内】

1. 日 時 2026 年 1 月 10 日（土） 10 時 00 分（受付開始）～15 時 30 分

2. 会 場 岐阜大学 柳戸キャンパス（〒501-1193 岐阜県岐阜市柳戸 1-1）

<http://www.gifu-u.ac.jp/access/>.

共通教育C棟 31・32・33・34 番教室（会場 1・2・3・4）

3. 日 程

受 付 10:00 ～

研究発表① 10:30 ～ 11:00 （会場 1・2・3・4）

研究発表② 11:00 ～ 11:30

研究発表③ 11:30 ～ 12:00

研究発表④ 12:00 ～ 12:30

休憩

研究発表⑤ 13:30 ～ 14:00 （会場 1・2・3）

研究発表⑥ 14:00 ～ 14:30

研究発表⑦ 14:30 ～ 15:00

研究発表⑧ 15:00 ～ 15:30

交流会 15:40～17:00 （会場 4）

4. 参加費 3,000 円（交流会費を含む）会場にて徴収します。

* 予稿集は作成しません。

* 土曜日は、学内の食堂や売店が休みとなります（コンビニは営業）。会場校周辺には飲食店があまりありませんので、食事等は各自でご用意くださいますようお願いいたします。

5. 参加申込

* 事前参加申込期間（12 月 10 日（水）まで）は終了していますが、当日参加も可能です。直接受付へお越しください。

6. 発表申込（締め切りました。）

7. 懇親会

18:00 から JR 岐阜前で開催します。会費は 5,000 円程度を予定。

@RUBETTA (ルベッタ) 岐阜県岐阜市長住町3丁目18 TEL 058-214-9399

<https://rubetta-gifu.com/>

8. 学内案内



9 研究発表プログラム

＊発表 20 分、質疑応答 9 分、入れ替え 1 分

(計時はストップウォッチではなく、各会場司会の時計で行います。)

＊発表者は、資料(書式は『国語科学習デザイン』に準ずる)50部を当日持参し、会場の所定の位置に置いてください。

＊発表者用のプロジェクター、スクリーンは会場にございます。PC等のご自身でご用意ください。接続はHDMIに対応しております。その他のインターフェイスはご自身でご用意ください。

＊当日資料は下記のGoogleドライブにアップすることができます。

<https://drive.google.com/drive/folders/1HnceIkqjiQjvMY8X4if04za3oMRf5Pb-?usp=sharing>

会場 1 31 番教室 司会：①～④大島彩弥香・渡辺優菊、⑤～⑧岩崎直哉、武田純弥

①国語科における「主体」についての一考察

—学校支援プロジェクトにおけるアクションリサーチ—

山本康生・工藤紗樹・吉澤和志(上越教育大学教職大学院・院生)

国語科における子どもの「主体」については様々な議論がされている。本研究では「主体」についての議論を整理し、国語の授業時に主体の表れる姿を「自らテキストに向き合い、意味付ける姿」とした上で、その姿が現れることを目指した授業実践を中学校二年生に向けて行った。複数の単元の学習者の姿を分析・考察する中で国語科における「主体」について再度検討したい。なお本稿は学校支援プロジェクトの実践をまとめたものである。

②〈問い〉づくりを通して「物語を読む」ことの授業実践

—学習者が授業の〈問い〉を選ぶ時に起こる二つの関連性に着目して—

渡辺優菊(品川区立八潮学園)

〈問い〉づくりを通して物語を読むことは、テキスト間の関連性に気づく契機となり、その気づきが学習者同士の関係変化を促すことで、読みの交流をより明確に捉えることができると考える。この相互作用に着目し、「複数の〈問い〉をまとめてもよい」という条件で〈問い〉を選ぶ学習に取り組んだ場合に、テキストにおけるコヒアランスの発見が見られるか、グループ内の会話においてレリバンスの変化が生じるかについて検討していく。

③読みの学習の問いに対する学習者個々のアプローチ

—小学校第6学年「やまなし」での実践を事例として—

山田真由美(尼崎市立武庫庄小学校)・前野翔大(姫路市立豊富小中学校)

問いづくりを中核とした読みの学習では、教材の特性が問われず表層的な読みに終始してしまうことが危惧される。そこで本研究は、問いは教師が提示し、学習者は問いに対する「切り口」を考えるとという問いづくりの形を提案する。実践では、学習者の切り口が問いの段階的な解決を可能にする「縦」の関係を繋ぐとともに、自他の切り口が関連し問いに対する複合的なアプローチを生み出す「横」の関係を繋ぐような様相が確認できた。

④「〈審美的交流〉」を促す授業デザイン

—問い作りと問いをめぐる対話を通して—

大島彩弥香（上越教育大学附属中学校）

「少年の日の思い出」を授業で扱い、問い作りとそれらの問いをめぐる対話を行ったところ、読者の作品との「〈審美的交流〉」と考えられる反応が見られた。「〈審美的交流〉」の具体的な様相及び授業デザインとそれらの反応との関係を明らかにすることを本稿の目的とする。

（休憩）

⑤「ちいちゃんのかげおくり」における要点駆動の読みの学習デザイン

—寄り添う問いと仕掛けの問いに着目して—

吉野竜世（上越教育大学教職大学院・院生）

「ちいちゃんのかげおくり」において、参加者のスタンスから見物人スタンスの過渡期にいる小学3年生が、要点駆動の読みに至る為に、ちいちゃんに寄り添った問いと物語の仕掛けに焦点を当てた問いが学習デザインに位置づく必要がある。これらの問いを基に、読みの交流を学級全体で行い、ワークシート及び発話プロトコルを分析・検討し、学習デザインの有効性を探る。

⑥対話フィードバックを取り入れた読みの交流に関する事例研究

滝沢絢子（上越教育大学大学院・院生）

本研究は、学習者のグループ対話に対する苦手意識を改善するために、対話フィードバックを取り入れた授業実践である。毎時間、満足度の高いグループ対話をフィードバックすることで、学習者の読みの形成に寄与する対話の機能に気付かせる方法をとった。学習者の発話を質的に分析し、学習者間の対話の様相の変化を明らかにし、対話フィードバックの有効性を検証した。

⑦文学作品の「評価構造」を読むことに関する実践的検討

—小学校2年生「きつねのおきゃくさま」の実践を事例に—

武田純弥（南魚沼市立中之島小学校）

文学作品の読解において「情報駆動」「内容駆動」「要点駆動」の3つのモードで読みの様相を検討する取り組みがなされている。本研究では、「きつねのおきゃくさま」を教材とした授業実践における学習者の読みの形成過程を質的に分析する。質的な分析の結果に基づいて学習者の「読みのモード」の具体的な様相を明らかにすることを本研究の目的とする。

⑧ミステリー作品の教材化に関する一考察

—新教材「友情のかべ新聞」の最後の一文に着目して—

岩崎直哉（富山国際大学）

令和6年度版（光村図書）採録「友情のかべ新聞」は、初めての推理小説である。実践事例を俯瞰するに、伏線や構造の面白さを味わうことに主眼が置かれている。推理小説における最大の楽しみが謎解きにあることに鑑みれば当然のことであるが、文学教育としてそれだけでよいのだろうか。本研究では、物語の最後の一文に着目し、語り手ではなく登場人物としての〈ぼく〉を問うことで、謎解きだけに終わらない学習デザインを考察する。

会場2 32番教室 司会：①～④神永裕昭・藤原隆博、⑤～⑧井上功太郎・藤野匡裕

①論証の読解に関する指導の観点

—高校生の実態調査から—

栞原一輝（筑波大学大学院・院生）

論理的文章の論証を読解する指導では、何を押さえる必要があるのか。そのことを明らかにするため、高校生に文章中の論証を読ませ、その構造を図示・説明させる実態調査を行った。さらに、回答された図や説明の意図を問うインタビュー調査を行った。その結果、高校生の論証理解には一定の傾向が見られた。本発表では、生徒から提出された記述回答とインタビュー調査の結果から高等学校における論証を扱った指導の観点を考察する。

②複数の意見文を批判的に読み、豊かな表現で意味づける

工藤武大（秋田大学教育文化学部附属中学校）

情報が溢れる現代社会で、子どもたちには、多くの情報を批判的に捉え価値判断する能力が求められている。光村図書中学三年「複数の意見を読んで、考えよう」では環境問題に関する三名の意見が取り上げられている。それらを比較する中で、文章の特徴を見出して筆者の意図に迫り、それぞれの意見文を意味づける学習を行った。この単元学習を通し、批判的に読むことで、豊かな表現を用いて考えを深める生徒の姿について考察を行った。

③小学校国語科における、教育的鑑識眼に基づく学習評価の研究

—要旨を捉える読解方略指導に着目して—

藤原隆博（江戸川学園取手小学校）

本研究は、説明的文章「言葉の意味が分かること」で一度要旨のまとめ方に関する読解方略を形成した学習者が、「固有種が教えてくれること」を読む際に、その方略をどのように再形成するのかを追究した。教育的鑑識眼に基づく対話的な学習者評価を逐語的に分析し、学習者が要旨の捉え方を再構築していくプロセスを検証した。学習者はテキストによって、自らの読解方略を組み換える必要があるとの認識をもつことが明らかになった。

④文学テキストを読む学習における「前日譚」創作の可能性

神永裕昭（岐阜聖徳学園大学）

文学テキストにおける登場人物は、語り手が語る物語（テキスト）の枠を超え、その前後の物語世界にも潜在的に存在する。この潜在的な物語世界は、語り手が語る物語（テキスト）と連続的かつ不可分な関係の上に成立する。本発表では、大学生が創作した前日譚と振り返りの記述の分析から、前日譚の創作を通した文学テキストを読むことの学習の可能性について論じる。

（休憩）

⑤創作指導における単元構造の分析

杉山瑠唯（美作大学・学生）

本研究は、創作指導の学習デザインのあり方を明らかにすることを目的とする。「書くこと」の領域における創作単元の指導過程の内実はこれまで十分に解明されてこなかった。そこで、文種ごとの創作の単元を「事前（創作前）」・「事中（創作中）」・「事後（創作後）」に整理・分析し、指導場面で必要な指導を明らかにする。

⑥共同体を生成する書くこと実践

—日記・学級通信を中心にした事例研究—

村上晃一（北海道教育大学教職大学院）

国語科「書くこと」指導で目指すべきことに、生涯にわたって書き続ける子どもの育成が挙げられる。その実現のため、日記指導など、国語科教育外での書くこと指導から示唆を得ることには意義があると考えられる。本発表は、書き続ける子どもの育成を日記と学級通信によって意図的に仕組んだA教諭（小学校6年生担任）の、国語科授業外の実践を取り上げた事例研究である。実践によって、どのような児童の学びが生起しているか分析する。

⑦語彙獲得を促す書くことの学習デザイン

—説明型自己紹介文の書くことを通して—

藤野匡裕（東京都立立川国際中等教育学校附属小学校）

今日の文章は、生成AIによってより簡便的なものへと変わってきている。何度も修正を依頼し、自身の意図する文章へと昇華することができる。しかし、それは自身の力となっているとは言えない。文章の構成はもちろん、知らない語彙など、自身に成り代わった別の文章へと変化を遂げている。小学校段階における辞書の活用、また語彙の獲得を目指すことの楽しさ知る契機として、自身を紹介する文章を書く学習デザインを提案する。

⑧小学校物語教材における配列と学習目標

井上功太郎（美作大学）

本発表では、住田勝（2015）が提出し、小川高広（2020）が実践から支持した「読みの発達モデル」と教科書の物語教材から想定される学習者像が対応するものになっているのかを検討するものである。このことを通じて、読みの発達モデル・教材の特徴・学習目標との間にあるズレを明らかにする。

なお、本研究は美作大学職員研究助成「「敬体」が与える学習者への影響—小学校国語教科書から考える—」の成果の一部である。

会場3 33番教室 司会：①～④上月康弘・佐藤美由紀、⑤～⑧橋本祐樹・岡田充弘

①「象徴」に着目した文学教材の対話的な学習デザイン

—高等学校第一学年「鏡」を題材として—

神田桃花（玉川大学教職大学院・院生）

文学において「象徴」は重大な要素だが、従来の研究では学習者の認識の差異が見過ごされてきた。本研究では、学習者の象徴に対する認識を、メタファーの抽象性とコンテキストの関連性という二つの位相から明らかにし、これに応じた学習デザインを提案した。実践では、問われた言葉に対して二つの位相を組み合わせた四象限マトリクスを用いることで、自他の読みの差異に気づきながら象徴性を読む学習者の様相が確認できた。

②語り手との対話に向かう学習者のレディネス

藤原愛心（松本大学・学生）・上月康弘（松本大学）

本研究では、小学4年生を対象とし、語り手との対話に向かう学習者のレディネスと足場かけの在り方について探ることを目的とする。本研究では、物語内容にかかわる〈問い〉と、語りの意図について問う物語言説にかかわる〈問い〉に対する学習者の反応を分析し、語りの意図について言及する学習者がどのようなレディネスを備えているのかを確認した。当日は、捉えた学習者の様相から、有効な足場かけの在り方について考察したい。

③「交流前の目標設定」が読みの交流に及ぼす効果

—中学3年「故郷」における授業実践を通して—

米山花菜（東京学芸大学教職大学院・院生）

本研究は、中学校国語科の読みの交流における学習者の期待や目的意識の実態に応じた指導法を検討するものである。中学3年「故郷」の実践において、学習者が自らの読みの状況や、交流への期待に即した具体的な行動目標を選択する「交流前の目標設定」を行い、特に交流への効力期待が低い層への効果を検証した。その結果、本手立てが交流への参加の足場かけとしての機能を果たし、能動的な解釈形成へと導くことが明らかとなった。

④「故郷」における読みの交流において学習者が個々の読みを持つ過程の考察

佐藤美由紀（安田学園中学校高等学校）

本研究は一人称視点で語られる文学教材「故郷」において、読みの交流を通し学習者が個々の読みを持つ過程を考察したものである。

「故郷」の初読の疑問として主人公の人物像に関する疑問が多く挙がった。そこで、語り手である主人公の人物像を問う〈問い〉1を経て「物語行為」を問う〈問い〉2による交流を行った。二つの交流を通し叙述に基づき自身の読みの形成に至った学習者とそうでない学習者の比較から、その過程の考察を行う。

（休憩）

⑤文学の教材研究における教師の課題意識の変容

—「空所」概念を取り入れた授業実践を通して—

伊藤圭亮（上越教育大学教職大学院・院生）

研究の全体の目的は文学教材の教材研究手法の開発である。本稿はその開発に向けての一過程として、小学校教諭の課題意識とその変容過程を明らかにすることである。小学校教諭3名に対し、「空所」概念を取り入れた提案授業の前後に、教材研究の意識についてインタビューを実施し分析した。当初教材研究について困り感を抱いていたが、授業観察と省察を経て「問いをつなぐ単元を作りたい」などという前向きな意識の変容が見られた。

⑥文学作品における授業改善のための子どもの「見取り」

太田諒平（上越教育大学教職大学院・院生）

大和ら（2017）が「授業の構成が学習者の主体的・協働的な活動で占められるようになれば当然、教師の役割も変化する」、「インターベンションの質を支えているのは「見取り」の質」と述べるように、実践現場での「見取り」の重要性は増している。本研究では、個別的な読みが創り出される文学作品の授業の「見取り」について、読者反応理論家であるランガーの〈像〉形成の概念を援用し、小学校での実践データを基に検証・考察を行う。

⑦生成AIを活用した小学校国語科学習

—「大造じいさんとガン」の実践を通して—

岡田充弘（中村学園大学）

小学校国語科 第5学年「大造じいさんとガン」の指導において、教材研究・授業準備・学習過程に生成AIの活用を試みた。教材研究では、教材分析の中で新たな気づきや、どの叙述に着目してどのように読み深めていくか考えることに用いた。授業準備では、内容の理解を確認する問題作成や続き話のモデル文の創作に用いた。学習指導では、教材文について学習した後、後日譚を考える授業場面で用いた。

⑧「読みの交流」における学習者のレリバンスの諸相

橋本祐樹（茨城キリスト教大学）

読みの交流において、学習者の交流参加の在り方は多様であり、その変容を捉える視点として、学習集団内での人間関係上の役割・位置を指す「レリバンス」が分析に用いられてきた。本稿では、先行する実践研究を概観し、学習者が交流内でいかなるレリバンスを形成・変容させてきたか、その具体的様相を整理する。得られた知見に基づき、学習者の多様な在り様を参与様式として類型化し、その全体像を明らかにする。

会場4 34番教室 司会：①～④中西郁・廣田鉄平

①伝統的な言語文化「親しむ」の概念の検討

—「浦島太郎」の現代版と御伽草子版の比較を通して—

林原健太郎（富山国際大学・学生）

小学校国語科における「伝統的な言語文化に親しむ」指導が音読に偏り、内容への理解が十分に深まっていないという現状を踏まえ、現代版と御伽草子版の「浦島太郎」の比較読解による学習モデルを提案する。竹村の〈共感→信頼→respect〉の理論を枠組みとし、模擬授業を行った。その実践結果のプロトコル分析によって、学習者が古典の世界への理解と親しみを深め、当時の価値観を反映した解釈や創造的読みが促進されることを実証した。

②「短歌・俳句」の音読・暗唱における学習者の変容

—「メトロノーム」による指導の効果—

廣田鉄平（横浜市立万騎が原小学校）

日本語定型詩歌は、日本語の性格に則った音数律に係るものであり、とりわけ学習者が「短歌・俳句」に「親しむ」ためには、古典への respect を醸成することが求められる。

本研究では、小学校段階の学習者が「短歌・俳句」への respect 醸成の礎をなす手立てとして、「メトロノーム」を用いた指導の学習者の変容を示す。指導の結果、学習者に「四律拍」の日本語の性格に則ったリズムが内在化され、respect 醸成の礎をなした。

③「関係概念」としての古典観に基づく「平家物語」の学習デザイン

工藤紗樹（上越教育大学・院生）

渡辺春美（2018）は、古典嫌いの背景にある「典型概念」に基づく古典教育の見直しの必要性を指摘している。そこで本研究では、「関係概念」としての古典観に立ち、学習者の問題意識を駆動力として、読解・解釈・批評の三段階を通じて古典の内化を促すことを目指した。教材には『平家物語』『扇の的』を用い、伝本比較を核とする学習をデザインし、その有効性を学習者のワークシート、発話プロトコルから分析・考察する。

④『徒然草』における「名人」の受容と比べ読みの授業デザイン

中西郁（東京都立六郷工科高等学校）

『徒然草』には兼好が名人に取材した章段が多くあり、110 段「高名の木登り」や 92 段「ある人弓射ることを習ふに」などは多くの教科書に収録されている。これらの章段の授業が「名人の教え」を理解することに終始する例も見られるが、複数の段を読んでいると、兼好が名人の教えから人間心理の本質に着目しようとしていることが感じ取れる。本研究ではそんな『徒然草』の「名人」の章段を生徒に比べ読みさせ、学習者がどのような兼好像を形作るか追っていく。